

# 風街 だより

「本来業務の経理のチェックだけじゃない。スキー場リフト係、チケット売り、調理場の皿洗い…。何でもやりました」

名寄市産業振興課主幹の佐藤篤さん(43)は、市の第三セクター、名寄振興公社での4カ月間の社員生活を振り返る。公社は昨年、粉飾決算と債務超過が発覚。その再建のための異例人事で、別の職員といったん市を退職し、3月末まで出向した。

公社が運営する市営名寄ピヤシリススキー場と隣の温泉ホテルの管理が冬の大仕事。公社社員6人のほか、従業員100人近くが現場で働く。佐藤さんは忙

名寄支局長・杉浦泰隆(55)

しくて回らない現場に入ること  
で問題点を探ることができた。  
現場からも改善の提案をもらえ  
た」と明るく話すが、立て直し  
に動く市の必死さがうかがえ  
る。

## 「雪質日本一」守るために

公社は、佐藤さん経理の抜本改革に着手。この冬の営業成績が、今後を占う試金石と目されていた。だが新型コロナウイルス感染症への懸念でピヤシリが16日間も休止となり、売り上げは近年にない低水準にとどまった。3月末で人口が2万7千を切り、財政に余裕のない市にとって負担がより重くなりそうなお配だ。

新型コロナウイルスの影響で、この冬の営業成績が落ち込んだ名寄ピヤシリススキー場。最終日の客はまばらだった。3月20日



公社の経理を指導する東京の公認会計士渡辺靖雄氏(42)は札幌市出身。かつて後志管内岩内町職員として町営スキー場を担当した。1月の市議会向けの勉強会で講師を務め、自治体職員の数とスキー人口が減る予測を示した上で、自治体によるスキー場経営のリスクを指摘した。「地域の雇用や子どもたちのためにピヤシリは残してほしい。それにはリスクを止しく認識し

た運営が大切」と語る。

ピヤシリはリフト4本。ホテルは34室。道北では有数のスキー場とはいえ、訪日客を積極的に呼べる規模ではなく、旭川空港からのアクセスも悪い。加えて道内に多いリフト一本の町民スキー場よりもコストははるかにかかる。市は、経営のノウハウをもつ外部の事業者の力を借りることも検討し始めた。

一方、この冬前半は思わぬ追い風も吹いた。雪不足に悩む道央のスキー場を尻目に、比較的降雪に恵まれたピヤシリはスキー客でにぎわった。私も休日何度か通った。さらさらの雪は自分の腕が上がったかと錯覚させられる。「雪質日本一」を誇るだけのことはあると思った。このスキー場をどう守り、次の世代に引き継ぐのか。市のかじ取りは難しさを増している。